人生のターニングポイントに

甲南女子大学教授

はじめに

この子どもアイディアコンテストには、第13回（2015年）から関わっている。初めて子どもたちのプレゼンテーションを見た時の衝撃はいまでも目に焼き付いている。

当時は、低学年の部は一年生からだった。脳性麻痺で寝たきりの妹と外で一緒に遊びたいという夢を叶えるために、脳で考えたことを感知し体を動かす機械を考え、絵にして、立体模型を作り、プレゼンテーションを行っていた。新人野球選手の初回初球いきなりホームラン級の感動だった。不覚にも涙ぐみ、それ以来、このコンテストの虜になり、今日に至っている。

第16回（2018年）に一部の受賞者と保護者にインタビューする機会が得られた。作品やプレゼンテーションからだけでは見えない、子どもたちの思いや苦労・工夫、これまでの学びや体験の活用、保護者の程よいかかわり方等が見えてきた。

この経験をもとに、第19回及び第20回のファイナリスト（第20回は最優秀賞及び優秀賞の受賞者）に手分けしてインタビューすることとなった。

今年度（第20回）の各受賞者へのインタビューの報告とは別に、本稿では、各受賞者の「チャレンジシート」とインタビューの成果から共通に見られることを中心にまとめてみたい。なお、「チャレンジシート」の記述内容を紹介する際は、読みやすいように一部漢字にしている。

小さな成功体験の繰り返しが新たな原動力を生み出す

本コンテストは、最初はアイディアを絵と文章で表現するところから始まる。入りのハードルは高くない（今年度は825件の応募）。

ホンダ社員120名による第一次審査を通過した子ども20名に対して十月中旬に「あなたは最終審査に残りました。立体模型を製作し、プレゼンテーションを行ってください」「製作の様子を『チャレンジシート』に書き残してください」といった連絡がくる。

ちなみに、「アイディア賞候補者」120名に対しては、十一月初旬に「立体模型を製作し写真で送ってください」との通知を行っている。今年度は88名が立体模型の写真を送り、「アイディア賞」を授与されている。

最終審査会に進む20名の子どもたちも、立体模型を念頭において絵や文章を書いている場合は少ないので、「寝耳に水」のことだろう。実際、インタビューの中では「面倒くさい」「嫌だった」といった回答がある。

一方、「学校から子どもアイディアコンテストの最終審査に残ったと電話があった。すごくびっくりした。すごく嬉しかった」（1年男児）という子どももいる。この子は本人が4歳の時に当時3年生だった兄が同コンテストの最終審査でプレゼンテーションを行っているのを見ている。その時の憧れがあるのかもしれない。兄弟姉妹で続けて応募することのよさがここにある。

大半の子どもがある意味「仕方なく」始めた立体模型づくりも、その製作過程において意識の変化が同様に見られている。ある子どもは「始めは嫌やったけど、作ってみたら楽しかった」、ある子どもは「始めはやるきがなかったけど、選ばれたので仕方なく。でも、作品づくりは楽しかった」と応えている。

平面を立体にすることは困難の繰り返しである。その一つ一つの解決に、これまでの生活経験や学校等での様々な学びを生かして工夫し乗り越えていく。一つ成功する度に喜びを感じる。小さな達成感の積み重ねが一か月に及ぶ製作活動の原動力になっている。

平面のアイディアが立体模型に仕上がっていくのは望外の喜びであろう。ある子どもは「考えたことが形になって嬉しい!!」と「チャレンジシート」に書いている。

そして、苦労して仕上げた立体作品を多くの人に見せたい、知ってほしいという強い思いが芽生えてくる。

筆者は仕事柄、学校関係者に「表現力を支えるものは『伝えたいという熱い思い』」「その熱い思いがあれば、子どもは伝える力を自ら進んで伸ばそうとする」「そのような思いを持たない子どもにいくら練習を積ませても効果はない」と話す。

8年間にわたり子どもたちのプレゼンテーションを見てきたが、多くの人の前で、原稿を見ることもなく、堂々と発表する姿に感動する。インタビューからは何十回と練習を積んできた事実が伝わってくる。最後まで頑張り、晴れの舞台を迎えるこ

とができているのは「自分のアイディアを多くに人に聞いてほしい」という熱い思いがあるからで、実はインタビューからは、さらにその根っことして「人の役に立ちたい」「こんな人を助けたい」という共通の深い思いがあることが窺える。

「チャレンジシート」がＰＤＣＡサイクルを助ける

教育の究極のゴールは、子ども一人一人が「自己の学びや生活の目標を設定し、その実現に向けてＰＤＣＡ（計画→実施→評価→改善）サイクルを日々廻し続けることができるようになること」と考える。

ＧＩＧＡスクール構想の推進により、子どもたちに１人１台端末が貸与されている。この端末を生かし、学習や生活を豊かにできるかどうかは、このような力を身に付けているかどうかにかかっている。

実際、文部科学省の各種研究指定校においては、週の始めに一週間の計画を立てさせ、金曜日の終わりの時間にその振り返りをさせている学校が少なからず現れている。

前項でも述べたが、元々は立体模型まで意図していなかった平面図形を立体模型に仕上げていくのは至難の業である。「チャレンジシート」にはその苦労と工夫の探究の過程が赤裸々に記されている。

インタビューでの「チャレンジシートを書くのはどうでしたか？」の質問に対して、ある子どもは「邪魔くさかったけど、逆にやることの整理がついたのでよかったです」と応えている。

今次学習指導要領改訂において、「育成を目指す資質・能力の３つの柱」（「生きて働く知識・技能」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性」）が示され、学習指導要領の各教科等の目標もこの３つの柱で再整理され、学習評価の３観点も３つの柱が基本になっている。

また、前述のＰＤＣＡサイクルにも関連するが、近年の教育では、学習において「めあて」と「振り返り」が重視されている。

「チャレンジシート」を紐解き、インタビューを行うことで、子どもたち一人一人にこの３つの資質・能力が製作過程やプレゼンテーションの準備に向けて発揮されていることが分かる。

「製作過程やプレゼンテーションの準備において、どのような課題に遭遇し、これまでの体験や教科等で身に付けた知識や技能をもとにどう考え。どう判断し、どう解決したのか」「人の役に立ちたいとの思いから生まれたアイディアを形にするために学校等での学びをどう生かしたのか」などが綴られている。このような活動を通して「次代を生き抜くために必要とされている資質・能力」が確かに発揮されて、着実に身に付いていっていることが窺える。

本コンテストも人生のターニングポイントに一つに

インタビューの最後に必ず訊くことがある。「このコンテストを通して成長したことはありますか」である。昨年度を含め、全員が「ある」と応えた。

ある子どもは「考えをまとめていく作業を通して、人前で発表するのが目標になった。他の人に説明するのが好きになった」（１年男児）、ある子どもは自己の成功体験から「作る楽しさを感じてほしい」（６年男児）と応えている。

傍で姿を見続けてきた保護者は次のように語っている。

「一人でやり遂げたっていう自信からか、なんかやってみようかなとかと、なんか言い方も変わってきたし、チャレンジしようっていうことが増えてきた」（２年男児母親）

「一生に一回もできない（経験）」「何に対しても集中力がついた」「いい経験をさせてもらいました」（２年男児父親）

「完成した時の二人の笑顔が忘れられません」「お互いに、苦手な部分と得意な部分を生かしながら、助け合いながら練習していた。その時も、喧嘩になることはなく、なんかこうしたらいいよね、ゆっくり言ってみてとか、お互いにアドバイスし合いながら、できていたので、なんか頼もしく見ていられました」（２年男児・４年男児母親）

「やっぱり自信がついた。～自分でも納得のいくプレゼンができて、すごく自己肯定感が上がった。～こういう場があったらどんどんやっていきたいという積極性も出てきたと思う」（６年男児母親）

４０年ほど大学教員を務める中で、大学だけでなく多様な職種の人とかかわり、半生を語り合う機会が数多くあった。

共通しているのは「それぞれに人生のターニングポイントがある」ということである。「この人と出会ったから、今の私がある」「この体験が大きく変わるきっかけとなった」と熱く語る姿を幾度となくみてきた。

昨年度に引き続き、十数名のファイナリストにインタビューを行った。大人になった時に必ず「ホンダの子どもアイディアコンテストがあったから、今の自分がある」と述懐してくれることだろうと手ごたえを感じる。

これからも多くの子どもたちがそのようなチャンスを持つことができるように、メンバー一丸となり支援していきたい。